

# 吹田操車場遺跡

—市営岸部中住宅建替工事に伴う発掘調査報告書—

平成16（2004）年3月

吹田市都市整備部  
吹田市教育委員会

## 序 文

吹田操車場遺跡は、JR京都線岸辺駅から吹田駅一帯に広がる遺跡です。当遺跡はこれまで中世遺跡として知られていましたが、最近になって財團法人大阪府文化財調査研究センターが実施した発掘調査により、古墳時代から近世にわたる複合遺跡であるということがわかつてきました。

さて、ここで報告する発掘調査は、市営岸部中住宅の建替工事の計画に伴い実施したもので、市営岸部中住宅は、もともと吹田操車場遺跡の北側周辺地にあたり、今回の建替工事に伴い実施した試掘調査によって遺構・遺物が確認され、新たに吹田操車場遺跡の包蔵地域が当地まで広がることが判明したものです。そして、今回の発掘調査は、吹田操車場遺跡において本市が実施した初めてのものとなりました。

本書は、この発掘調査で得られた成果をまとめたものです。本書が、吹田市の歴史を知る上での一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際しましては、地元をはじめとする多くの方々から、御協力と御理解を得ました。深く感謝いたします。

平成16（2004）年3月

吹田市教育委員会

教育長 椿 原 正 道

## 例　　言

1. 本書は吹田市都市整備部住宅政策課において計画された、市営岸部中住宅建替工事に伴う吹田操車場遺跡発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 発掘調査地点は吹田市岸部中1丁目地内である。
3. 発掘調査および資料整理は、吹田市立博物館文化財保護係田中充徳・堀口健二が担当した。整理作業については、吹田市岸部北4丁目10番1号、吹田市立博物館内資料整理室において実施し、資料の保管も同所において行なっている。
4. 調査および報告書作成に係わる経費は、吹田市都市整備部住宅政策課において予算化された。
5. 本報告書の執筆は田中充徳と堀口健二が行なった。執筆分担は第Ⅰ章・Ⅱ章・Ⅲ章-(1)を堀口、第Ⅲ章-(2)・(3)・Ⅳ章は主に田中が行い、堀口が一部加筆した。編集作業は堀口が行なった。
6. 本文中の遺物番号は、挿図と写真図版とも統一した。遺物の縮尺率は1:3である。
7. 図中の方位は磁北を示し、標高はT.P.（東京湾標準潮位）を示す。
8. 発掘調査および資料の整理には以下の諸氏の参加を得た。  
佐藤健太郎・秋山芳恵・岩崎康司・木船安紀子・桑原暢子・小久保瞳・杉本まりこ  
高井明美・西木恒幸・林裕子・森大樹

## 目 次

第Ⅰ章 位置と環境.....	1
第Ⅱ章 調査の経過.....	4
第Ⅲ章 調査の成果.....	6
(1) 基本層序.....	6
(2) 遺構.....	11
(3) 遺物.....	14
第Ⅳ章 まとめ.....	18

## 挿 図 目 次

第1図 周辺の遺跡分布図.....	3
第2図 吹田操車場遺跡発掘調査地周辺図.....	5
第3図 調査区配置図.....	5
第4図 北壁土層断面図.....	7
第5図 第1次遺構面平面図.....	8
第6図 第2次遺構平面図.....	9
第7図 第3次遺構平面図.....	10
第8図 谷状地形Aセクション断面図.....	12
第9図 各セクション断面図.....	13
第10図 遺物実測図1 .....	15
第11図 遺物実測図2 .....	17

## 写 真 図 版 目 次

図版1 発掘調査風景1	図版6 第3次遺構面	図版11 現地説明会風景
図版2 第1次遺構面1	図版7 土層断面1	図版12 遺物1
図版3 第1次遺構面2	図版8 土層断面2	図版13 遺物2
図版4 第2次遺構面1	図版9 土層断面3	図版14 遺物3
図版5 第2次遺構面2	図版10 発掘調査風景2	

## 報告書抄録

ふりがな	すいたそうしやじょういせき
書名	吹田操車場遺跡
副書名	一市営岸部中住宅建替工事に伴う発掘調査報告書一
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	田中充徳 堀口健二
編集機関	吹田市教育委員会
所在地	〒564-0041 大阪府吹田市泉町1丁目3番40号 TEL 06(6384)-1231
発行年月日	西暦2004年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 . / .	東経 . / .	調査期間	調査面積m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
すいた 吹田操車場遺跡	吹田市岸部中 1丁目地内	27205	73	34° 46' 32"	135° 32' 7"	20020930 ~ 20021105	224	市営住宅 の建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吹田操車場遺跡	集落遺跡	弥生時代 中世	谷状地形、 ピット、杭	弥生土器、瓦器 備前焼	なし

## 第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

### (1) 地理的環境

吹田市を地形的に見ると、市内北半部の千里丘陵部と南部の低地部に分かれ、このうち低地部は、さらに吹田砂堆を挟んで東側が安威川低地、西側が神崎川低地に細分される。

千里丘陵は、洪積世の地殻隆起運動によって形成された丘陵地である。そのため高所でも標高100m前後の比較的なだらかな丘陵地で、さらに丘陵東縁部には20m未満の台地が岸部から千里丘方面に広がっている。

安威川低地は、淀川や安威川が砂や粘土を堆積して作った沖積地である。礫層と、その上層に発達した斜交ラミナの見られる、シルト・粘土などの河川堆積物で地山を構成している。

吹田砂堆は、海岸線が今よりも後退していた頃、垂水方面から東へ流れる沿岸流によって運ばれた砂が堆積して形成された微高地である。

神崎川低地は、高川・神崎川・糸田川の堆積作用によって形作られた沖積地である。発掘調査成果でも、洪水砂層や埋没河川が数多く確認されており、古来より軟弱な地盤であったことが窺える。

### (2) 歴史的環境

#### 1. 弥生時代

本書で報告する発掘調査では、主に弥生時代と中世の資料を得ることができた。ここでは主に当該期の遺跡の動向をまとめておく。

吹田市の弥生時代の遺跡には、まず丘陵部に垂水遺跡や北泉遺跡がある。垂水遺跡は弥生時代中期後半から後期にかけての高地性集落である。比高約30mの繩文海進時の海食崖に面した丘陵上に占地し、竪穴式住居4棟と高床式建物1棟や、甕棺墓が検出されている。

丘陵部の中腹に位置する北泉遺跡では、上方から崩落してきたような堆積状況の遺物包含層中から、弥生時代前期から後期にかけての土器が、古墳時代前期の土器などと共にまとまって出土している。住居跡などの生活面は確認されていないが、背後の丘陵部に集落の存在を感じさせるものである。

また丘陵深部には山田銅鐸出土地がある。明治11(1878)年に、現在の万博公園内記念競技場付近で、溜め池の開削工事中に出土したと伝えられている。銅鐸は弥生時代中期の外縁付き紐式に分類される四区袈裟棒文銅鐸で、三島地方では最古級に位置付けられている。谷を下った南東2.5kmの茨木市東奈良遺跡では銅鐸・ガラス製品製造遺跡があり、山田銅鐸との関連が注目されている。

一方、低地部で展開する遺跡についてみると、安威川低地にある七尾東遺跡では、中期後半の竪穴式住居1棟が検出されている。壁溝の重複関係から同一地点での5回の建て替えを想定されている。目ヶ塚<sup>めがつか</sup>遺跡は、湿地状地形に臨む舌状微高地上の縁辺部に営まれた集落跡で、弥生時代後期から古墳時代前期の掘立柱建物8棟が検出されている。中ノ坪遺跡では、中期後半の方形周溝墓の可能性のある溝が検出されている。

神崎川低地の遺跡では、弥生時代の住居跡は発見されていないが、河道や自然流路内から、中期から後期にかけての土器群が、古墳時代の土器と共に良好な状態でまとまって出土する事例が増加している。<sup>くらう</sup> 蔵人遺跡では、南北に流れる自然流路内から、<sup>さきか</sup> 檻坂遺跡では、南北に流れる河道内から、それぞれ共に後期の弥生土器が古式土師器と共にまとまって出土している。垂水南遺跡でも河道内から、中期後半から後期にかけての弥生土器が古墳時代の古式土師器・初期須恵器・韓式系土器等と一緒に多量に出土している。これらはいずれも二次堆積遺物であり、一括性に欠けるものの、出土量と残存状態では目を見張るものがある。これらの調査事例から、神崎川低地にも弥生時代中期以降の集落跡の存在を予感させる。

また吹田砂堆上は水捌けが良く、古くより居住域として発達した所である。この微高地上に位置する都呂須遺跡では、現在のところ弥生時代の遺物包含層は確認されていないが、土木工事に伴い、一個体に復元できる中期後半の長頸壺などの土器片が採集されている。

## 2. 中世

平安時代から中世においては、荘園や条里との関連が考えられる遺跡が多くみられるようになる。

垂水南遺跡では、「垂庄」・「中庄」などと記された平安時代初頭の墨書き土器が出土しており、弘仁3(812)年の民部省符に見える東寺領垂水莊との関連が考えられている。

藏人遺跡では、鋤溝・畝・溜め池等の耕作地関連の遺構や、掘立柱建物の住居跡・鍛冶工房跡・井戸などの集落跡など、応永10(1403)年の「春日社領檻坂郷名主百姓等申状案」にその名を初出する、檻坂郷藏人村に関わるものとみられる遺構・遺物が多数出土している。特に近年の発掘成果として、第13次調査では、室町時代初頭の和鏡(菊花散双雀鏡)、第19次調査では、室町時代前半から中頃にかけての大溝と柵列で区画された、屋敷地と見られる遺構が見つかっている。

<sup>てしま</sup> 豊嶋郡条里遺跡は、同条里地割りの東限にあたり、鎌倉時代前半の両側に堤防を備えた水路と、水量調節用の堰状遺構の杭が検出されている。

安威川低地部に位置する目佐遺跡では、中世の2時期にわたる島下郡南部条里プランに則った水田区画が検出されている。また高城B遺跡では、平安時代後期から室町時代にわたる、建物跡や鋤溝などが検出されている。

この他、吹田砂堆上においては、高浜遺跡・都呂須遺跡などが中世の遺跡として知られている。

### (3) 吹田操車場遺跡の既往調査

吹田操車場遺跡は昭和42(1967)年に、土木工事に際して瓦器椀・羽釜・土師器小皿・軒平瓦などの中世の遺物がまとまって採集されて、その存在が知られることとなった〔網干1981〕。その後永らくの間発掘調査の機会はなかったが、平成10(1998)年に(財)大阪府文化財調査研究センターが実施した試掘調査と〔西口・三好1999〕、それに続く平成12(2000)年



- |            |           |             |
|------------|-----------|-------------|
| 1. 垂水遺跡    | 6. 中ノ坪遺跡  | 11. 豊嶋郡条里遺跡 |
| 2. 北泉遺跡    | 7. 鷺人遺跡   | 12. 高浜遺跡    |
| 3. 山田銅鐸出土地 | 8. 櫻坂遺跡   | 13. 高城B遺跡   |
| 4. 七尾東遺跡   | 9. 垂水南遺跡  | 14. 吹田操車場遺跡 |
| 5. 目傍遺跡    | 10. 都呂須遺跡 |             |

第1図 周辺の遺跡分布図 (S=1/40000, 上方が北)

の拡大調査により【阪田・黒須・河端・福島2001】、実相が徐々に明らかになりつつある。

(財)大阪府文化財調査研究センターによるこれまでの調査成果をみると、古墳時代より以前の人の生活痕跡は確認されていないが、二次堆積遺物として旧石器時代のサヌカイト製の剥片、縄文時代後期の土器・石器、弥生時代中期から後期にかけての土器・石器などが出土している。

古墳時代の遺構・遺物は、灌漑用水路と考えられる一直線に延びる素掘り大溝・畦畔の痕跡、「群集土坑墓」・人の足跡、それに祭祀遺構と見られる、底部を穿孔し中に大足（田下駄の一種）を納めた須恵器大甕が地面に据えられた状態で出土している。

飛鳥時代から奈良時代にかけての遺構・遺物は、「群集土坑墓」が検出されているほか、白鳳期の平瓦や、奈良三彩小壺が出土している。

平安時代の遺構は、条里地割りに則った水田区画・鋤溝のほか、居住域と見られ微高地上に営まれた掘立柱建物3棟などが検出されており、墨書き土器と転用硯の出土から、「識字能力のある人物の起居」を想定している。

中世の遺構・遺物は、掘立柱建物・素掘り井戸・鋤溝・畦畔・等間隔に打ち込まれた杭・畦の補強材、それに北西から南東方向にかけて流れる、深く大きな自然河川などが検出されている。井戸内部からは瓦器碗など多量の土器・曲物桶の底板や竹串などの木製品・鹿角加工製品などが出土している。

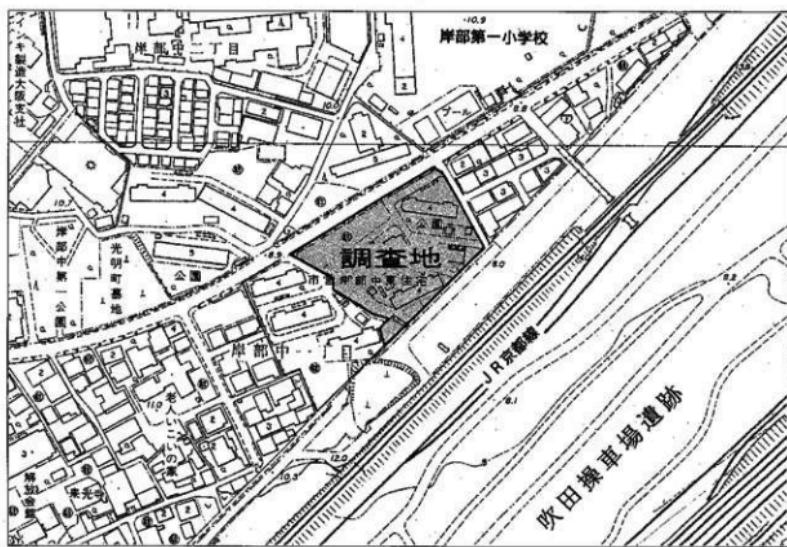
以上のように、吹田操車場遺跡は、先史時代から近世にかけての長きにわたる複合遺跡であることが確認されている。

#### 【引用・参考文献】

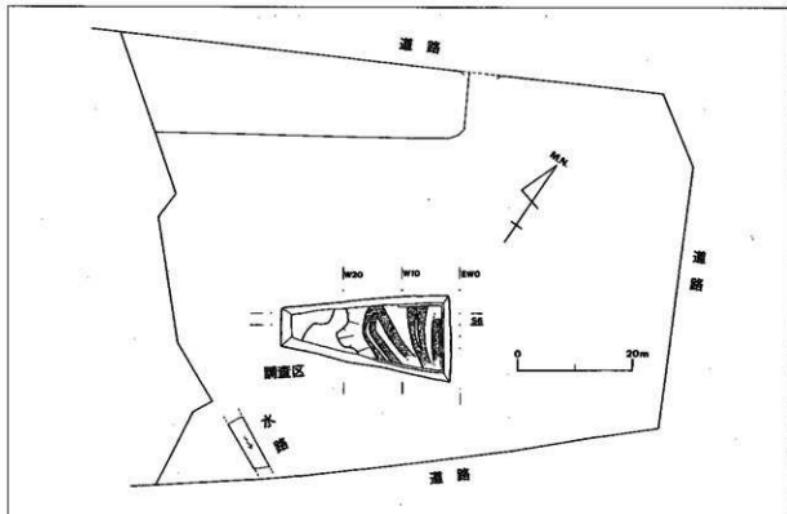
- ・梶山彦太郎・市原実1986 『大阪平野のおいたち』 青木書店
- ・西口陽一・三好孝一1999 『吹田操車場遺跡』 (財)大阪府文化財調査研究センター
- ・阪田育功・黒須亜希子・河端智・福島正和2001 『吹田操車場遺跡・吹田操車場遺跡B地点』 (財)大阪府文化財調査研究センター
- ・前田昇1990 『地質と地形』 『吹田市史』第1巻 吹田市史編さん委員会
- ・網干善教編1981 『考古編』 『吹田市史』第8巻別編 吹田市史編さん委員会
- ・時野谷勝監修1981 『郷土吹田の歴史』 吹田市市長公室市史編さん室・吹田市役所

## 第Ⅱ章 調査の経過

今回の発掘調査は、市営岸部中住宅の建替工事に伴う事前調査である。まず平成13(2001)年6月4から8日にかけて、2m×2mの試掘坑を8箇所設定して試掘調査を行なった。試掘調査の結果、建物の建替予定地のうちの一箇所から、弥生時代の遺物と落ち込み状の土層断面を確認し、吹田操車場遺跡の包蔵地域が当地にまで拡がることが新たに判明した。そして、この調査結果を踏まえて工事計画について検討したところ、一部建物が遺跡を破壊するものと判断されたため、今回建替工事に先立って、拡大調査を実施したものである。調査は吹田市立博物館文化財保護係が担当して、平成14(2002)年9月30日より11月5日の間に行なった。



第2図 吹田操車場遺跡発掘調査地周辺図 (1/30000, 上方が北)



第3図 調査区配置図

発掘調査は、工事予定地内において $29m \times 15m$ の台形状の調査区（面積約 $224m^2$ ）1箇所を設定し、まず盛土・攪乱土と、そのすぐ下位の旧耕土までをショベルカー等の工事用掘削機械を使って掘り下げ、さらに下層については人力などにより掘削した。そして、谷状地形や流路群などの遺構を検出し、これらの遺構に伴って弥生土器や中世の土師器・瓦器などの遺物が出土した。また調査最終段階で、調査区中央に $3m \times 2m$ の確認トレンチを1箇所設定して、下層の遺物包含層の有無などを確認した。

検出した遺構および遺物の出土状況などについては、詳細に観察し、写真撮影や図面の作成などによる記録作業を行なった。これらの記録作業は10月29日に終了し、その後、11月5日までに埋め戻し作業を終えた。

なお調査期間中の10月18日には、市民と吹田市立岸部第一小学校児童ら約50人の参加を得て現地説明会を開催し、発掘調査成果の概要を説明した。

### 第Ⅲ章 調査の成果

#### (1) 基本層序

調査区周辺の地表面は、標高（T.P.）約 $8.1\sim 8.2m$ 地点である。土層は攪乱を受けていない北・東・南壁断面の他、谷状の落ち込み地形を横断する形で設定したAセクションと確認グリッドにおいて観察した。

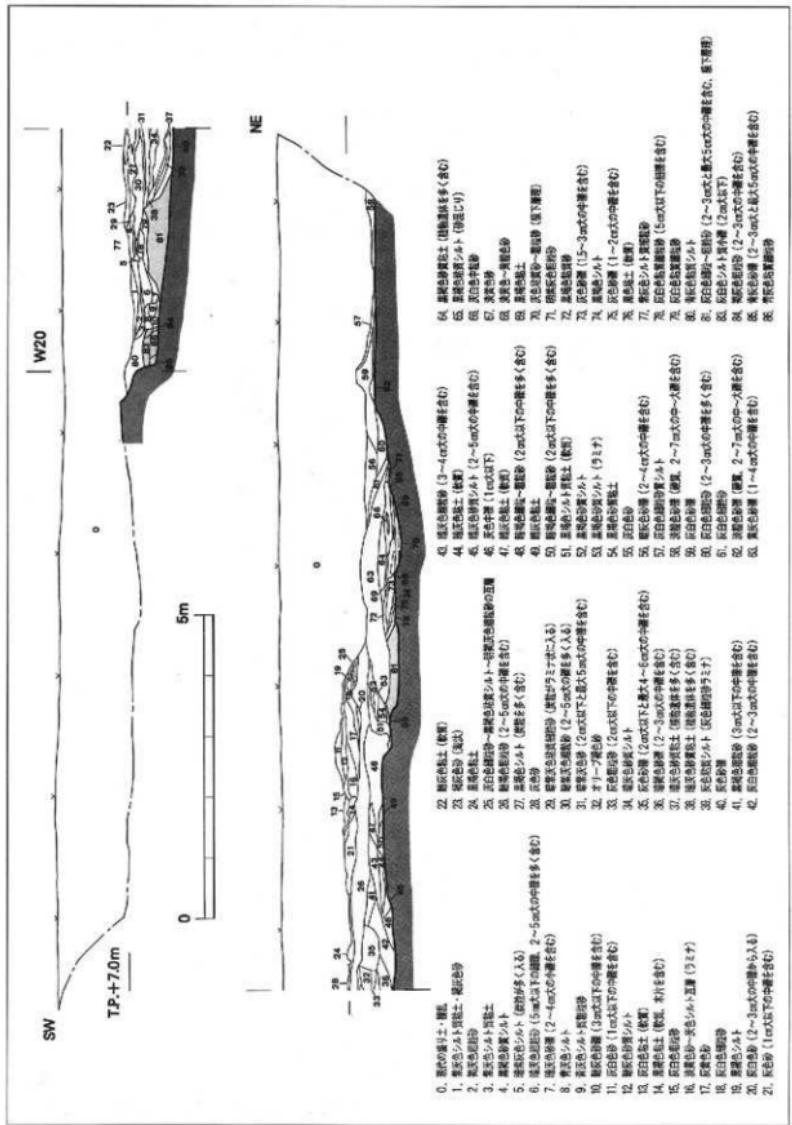
基本層序は巨視的に見れば、現代の盛土層や部分的に残存する旧耕土層からなる、平行堆積層によると整合面と、粘土～シルト（泥土）層と砂礫層からなる地山層があり、これを層界として東側へ大きく傾斜する大きな不整合面が見られ、この谷状地形を粘土や砂礫の水成堆積物が充填している。

調査区内の基本層序は以下の通りである。

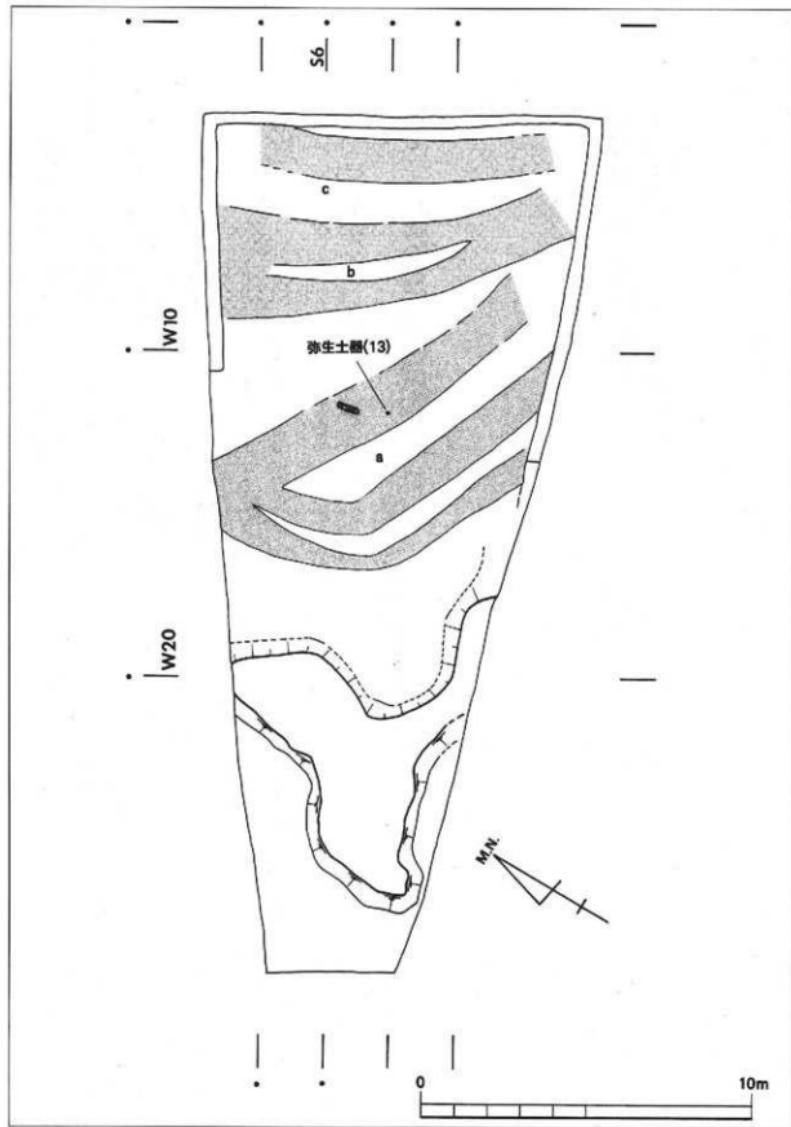
第Ⅰ層：現代の盛土および攪乱層で、層中には旧市営住宅のコンクリート基礎などが見られたことから、旧市営住宅建設時に伴う盛り土や基礎の掘り方である。層厚約 $90\sim 160cm$ を測り、西端部では遺構面よりも深く攪乱が及ぶが、未掘のため攪乱深度は不明である。

第Ⅱ層：暗青灰色粘質シルト層（細粒砂混じり）で、層厚 $25cm$ を測る。近代以降に形成された旧耕土層である。図示部分では見られないが、南壁断面と東壁断面において部分的に残存していた。

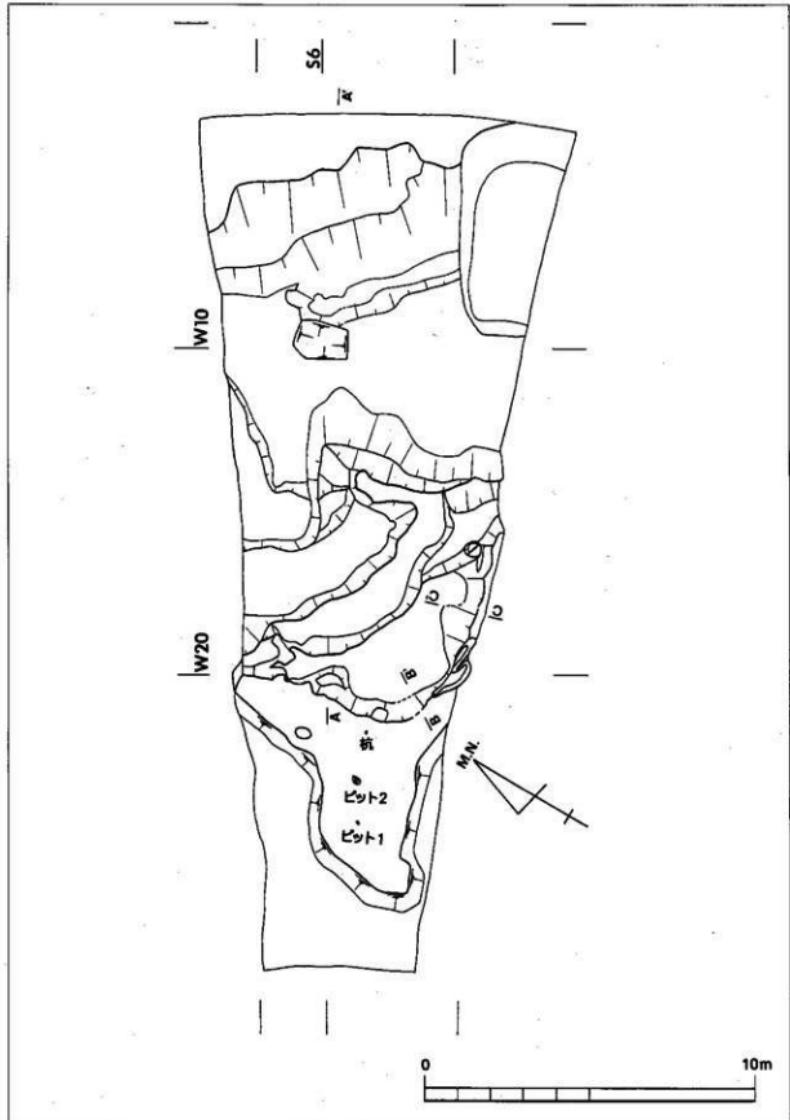
第Ⅲ層：旧来この地点に谷状地形が存在し、これが埋没していく過程で形成された堆積層である。これらの土層は、最上層に谷状地形埋没直前に展開した流路群の堆積層があったが、その下層は主に砂礫で構成されており、この間に粘土・シルト・砂が見られた。特に、この砂礫層には、灰白色シルト層が広く分布する深度があり、これを鍵層とし大別して二つの層群に区分される。



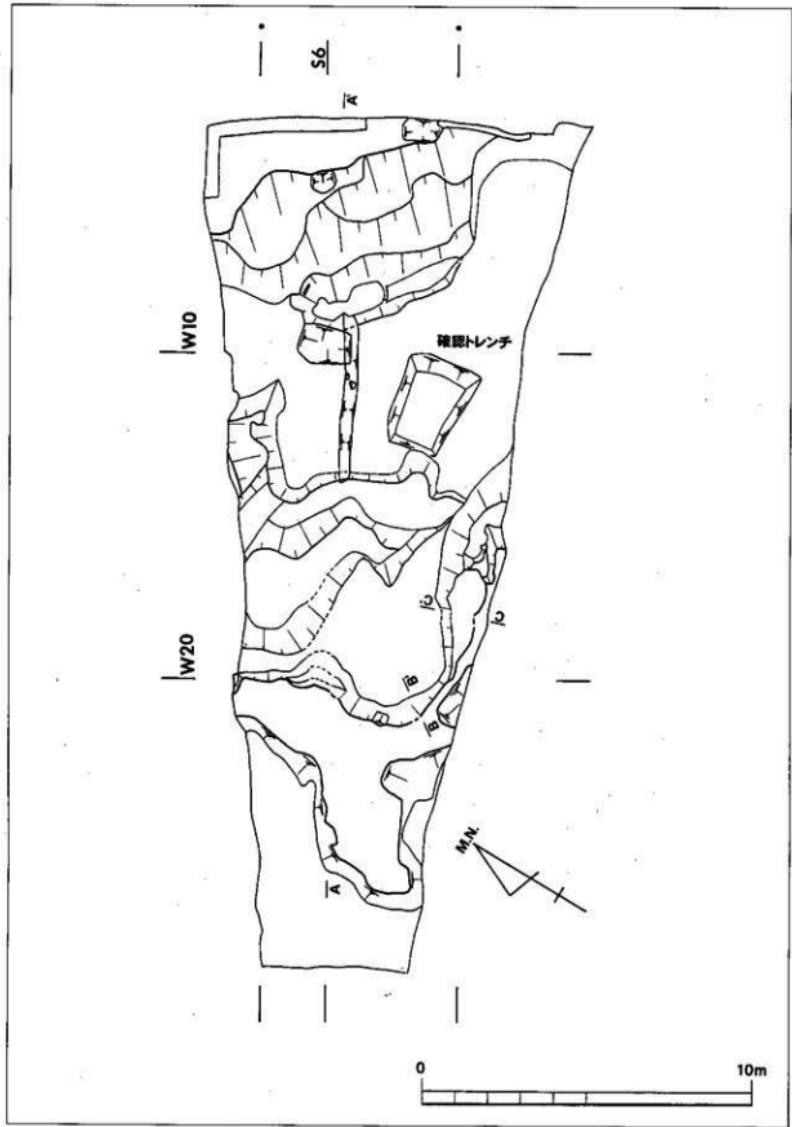
第4図 北壁土層断面図



第5図 第1次遺構平面図



第6図 第2次遺構平面図



第7図 第3次遺構平面図

第III - 1層：粘土～シルト～砂～礫層で、層厚最大約95cmを測る河川堆積物である。平行堆積と河床構造が幾重にも重なり合う不整合面が看取でき、堆積と侵食を複雑に繰り返しつつ徐々に埋没していく様子が見られる。これは堆積過程にある程度の時間の間隙が存在したことと意味している。砂やシルト層には水流の痕跡を物語る平行ラミナが多く見られ、部分的に斜交ラミナも見られる。また重量の軽いシルトや砂と重い礫の互層も多く見られることから、水流の遅い時期と速い時期を交互に繰り返していたことを物語る。

第III - 2層：硬質の灰色～褐色砂礫層で、層厚約35cmを測る。第2次面ベース層を形成する。堆積層は級下層理で、下方より上方へ漸移的に粒径が小さくなる上方細粒化を成す。水流のある状況の下で、時間の間隙を置かず一挙同に堆積したと見られる。

第IV層：明青灰色粘質シルト～砂質シルト～細粒砂層で、層厚約80cm以上を測る。標高約7.1mにおいて、主に調査区西側で見られ、遺構面ベース層および地山層を形成する。ほぼ水平堆積で、上方細粒化を成す。河川の沖積作用によって形成されたと考えられる、堆積層である。グライ化作用を受けており、最深部では湧水が少し見られた。

第V層：明青灰色～橙色砂礫層(粘土混じり)で、主に調査区東側の下位で見られた。円礫による細礫～中礫層が厚く堆積し、第III - b層と同様に粘土とからみ合って、非常に硬質になっている。

## (2) 遺構

遺構は標高約7.1mの青灰色粘土層をベースにし、3時期の遺構面が検出された。最上層に当る第1次面からは流路群を検出し、第2次面や第3次面からは谷状地形・ピット(小穴)・木杭を検出した。

### (a) 谷状地形

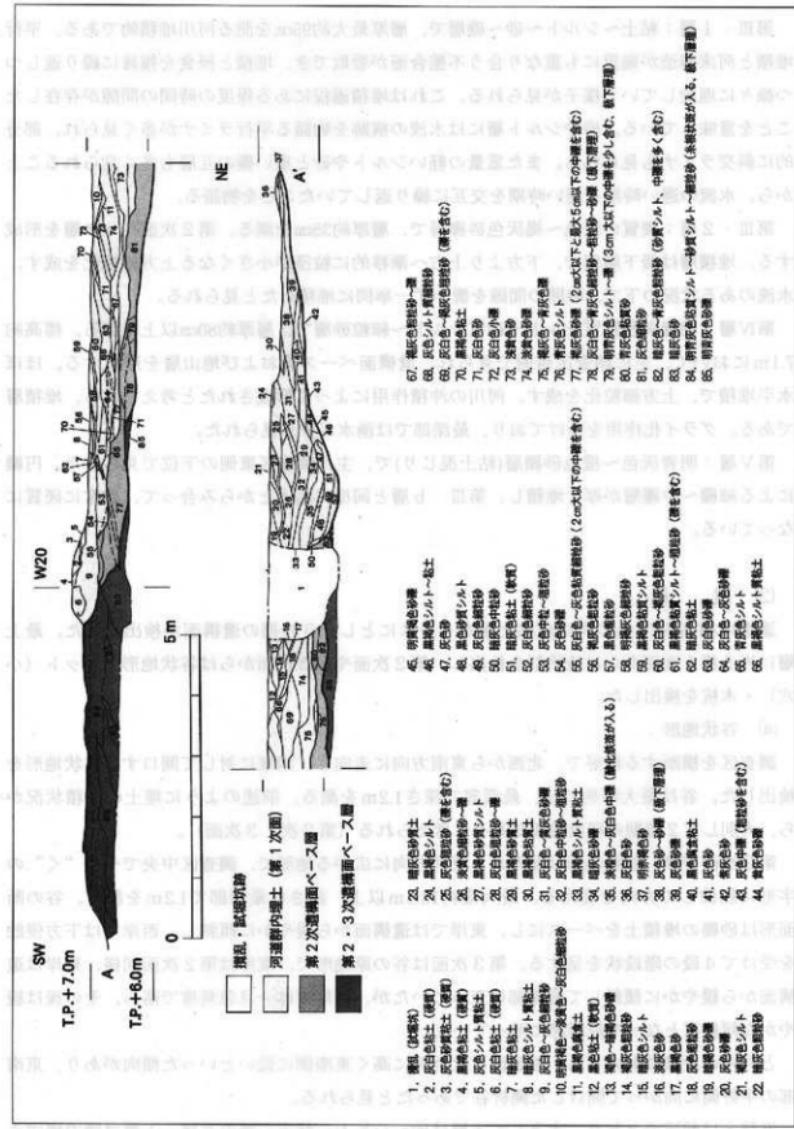
調査区を横断する格好で、北西から東南方向に走向し、南東に対して開口する谷状地形を検出した。谷は最大幅約17m、最深部で深さ1.2mを測る。前述のように埋土の堆積状況から、大別して2時期の埋没過程があると考えられる(第2次・3次面)。

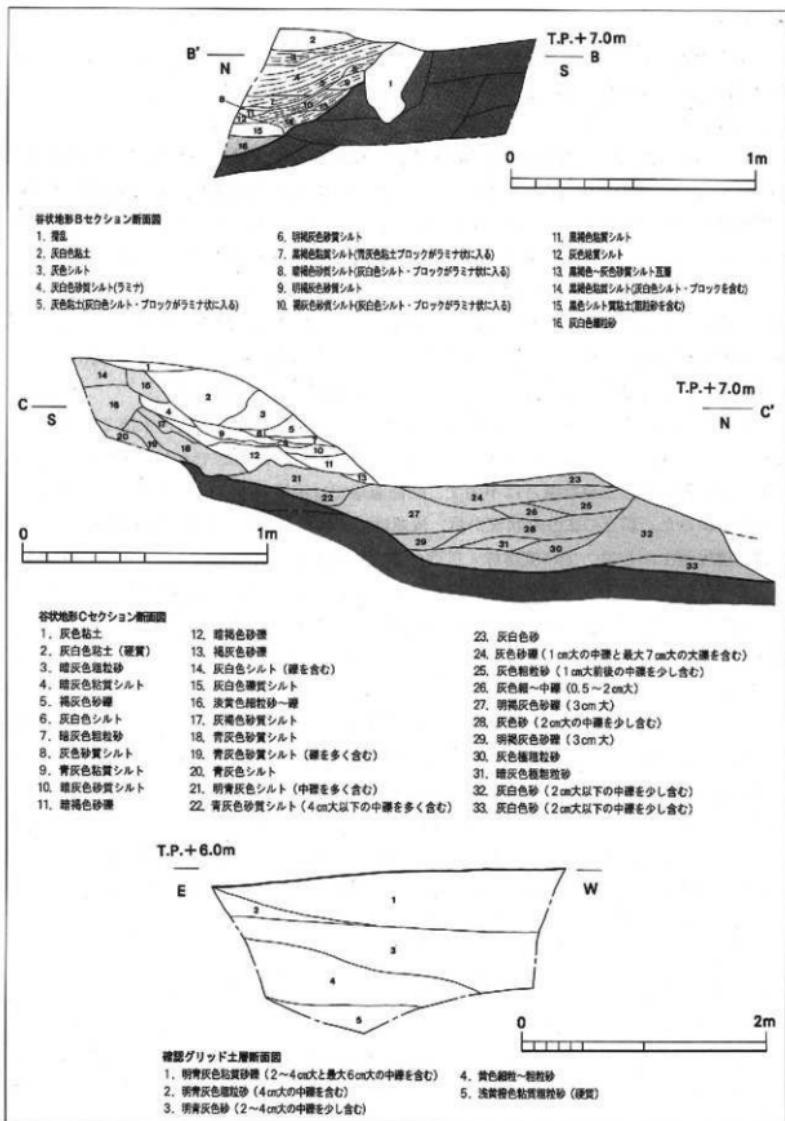
第2次面では、谷状地形は北西から東南方向に広がる地形で、調査区中央でやや“く”的字形に屈曲して方向を変える。最大幅約18.8m以上、深さは最深部で1.2mを測る。谷の断面形は砂礫の堆積土をベースにし、東岸では遺構面から緩やかに傾斜し、西岸では下方侵蝕を受けて4段の階段状を呈する。第3次面は谷の原地形で、東岸は第2次面同様、東岸は遺構面から緩やかに傾斜して最深部に至っていたが、西岸では一旦急角度で落ち、その後は緩やかな傾斜面となって最深部に至っていた。

どちらの段階においても、谷底面は北西側に高く東南側に低いといった傾向があり、東南部の平野側に向かって開口した開析谷であったと見られる。

堆積土は前述のとおり、主として上層は砂～シルト～粘土～礫の互層、下層は礫で構成されており、西岸は粘土およびシルト層、河床部はシルト層を、東岸は硬質の礫層をベースとしていた。谷状地形内においては、東岸よりむしろ西岸において地形の変化が著しいことが確

第8図 谷状地形Aセクション断面図





第9図 各セクション断面図

認された。

なおこの谷は近代に至っても完全には埋没せず、北壁および南壁断面の観察によると、最深部で約40cm程度の浅い凹地地形となって残存していたようである。

(b) 流路群

谷状地形埋没直前に、その谷状地形跡の底面を流域として、東方に若干進行方向を変えながら、蛇行して流れる自然流路群である。この蛇行方向は原地形の谷と同一方向で、原地形に影響を受けたものと考えられる。流路の本数は数え方にもよるが、分岐と合流を繰り返す大きなまとまりが3本ほど存在する。流路群aは谷下流に向かって3本に分岐し、流路群bは一度2本に分岐して再度合流する。流路cは分岐せずに緩くカーブする。このうち、流路群aと流路群bは東端の輪郭が不明瞭になる箇所で、流向の延長線上で交差が予想され、流路群は時間幅をもって重複し合う可能性がある。このうち最も明確なものは、W10ライン上に展開していた流路群aで、最大のものは幅170cmを測る。

流路堆積土はいずれも黒褐色～暗灰色の粘質シルトで、この段階で弱い水流であったと思われる。この流路は、遺構面精査時には目視でも輪郭が明瞭に確認できたが（写真図版2）、堆積土は未掘のため正確な深さは不明で、断面観察では流路の断面形や深さを確定することができなかった。以上のような状況から、流路はいずれもごく浅いものと思われる。

流路群堆積土からは、主に流路群a付近から、弥生土器の他、瓦器椀・土師器小皿等の中世土器や、加工痕のある木材等などの遺物が出土した。弥生土器と中世土器の出土位置が近いことから、弥生土器は二次堆積遺物の可能性が考えられ、谷全体が最終的に埋没したのは、鎌倉時代頃と推定される。

(c) ピットおよび杭

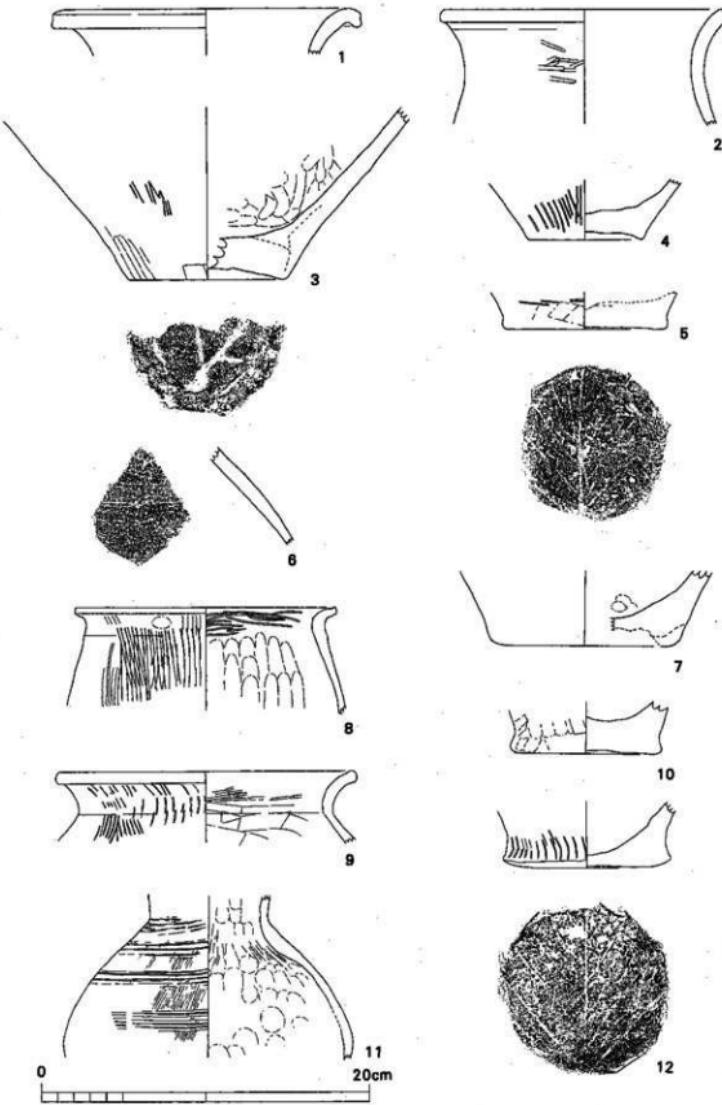
ピット1は平面形が梢円形で、東西10cm×南北7.5cm、深さ3cmを測る。ピット2は平面形隅丸方形で、東西20cm×27.5cm、深さ3.8cmを測る。木杭は5cm×7cmの角杭で、残存長8.5cmを測り、先端を鈍角の三角形状に尖らせる。

これらのピットと杭については、約1.4m間隔でほぼ真直ぐに並んでおり、深さも近似していることから、一連のものである可能性が考えられる。ピット内には遺物が一切含まれておらず、時期の特定には至らなかった。また杭は残存・腐食状況から見て、それほど古い時期のものではない可能性もある。

### (3) 遺 物

出土遺物は谷状地形の堆積土のうち、主に上位の流路埋土から、弥生土器・備前焼・団化不可能な小片の瓦器椀・土師器小皿等の中世の土器、器種不明の須恵器・陶器等が出土した。しかし流路より下層の谷堆積土および確認トレンチ内からは、土器など遺物の出土は見られなかった。

1～22は弥生土器で、このうち1～7は灰色砂礫層からの出土である。1は広口壺の口縁部で復元口径17.2cm、残高2.8cmを測る。外反する頸部は口縁部付近で屈曲し、外側下方に垂



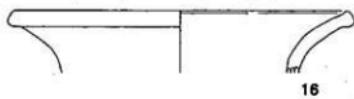
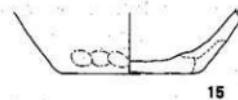
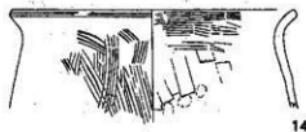
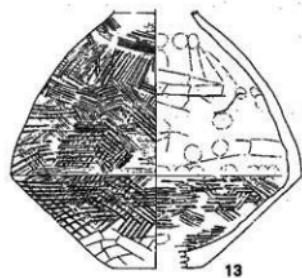
第10図 遺物実測図 (1)

下する。口縁端部外側に平坦面を持つ。2は壺の口縁部で、復元口径17cm、残高7.1cmを測る。緩やかなカーブをもって外反する頸部を持ち、端部を丸くおさめる。頸部に横方向の磨きを施す。3は壺の底部から体部下半部で、復元底径9.4cm、残高10.5cmを測る。外面に縦方向の磨きを施し、底部に葉脈痕が残る。4は底部で復元底径6.8cm、残高3.5cmを測る。外面に縦方向の磨きを施す。5は壺の底部で、復元底径10cm、残高2.2cmを測る。外面に螺旋状の叩き目が僅かに残り、底面に葉脈痕が残る。6は壺の体部で、2条の櫛描き平行線紋と1条の波状紋を描く。

8~12は灰色粗粒砂層からの出土である。8は甕の口縁部から体部上半部で、復元口径15.8cm、残高6.7cmを測る。張りのない体部に強く屈曲して横方向に外反する頸部が付き、口縁端部に平坦面を造る。外面に縦方向のハケ目、口縁部内面に横方向の磨き、体部内面に縦方向の指なでを施す。9は甕の口縁部で、復元口径4.5cm、残高2.8cmを測る。頸部は体部より屈曲して外湾し、口縁部に至り、端部外側に平坦面を持つ。外面に縦方向の磨き、口縁内面に横方向の磨きを施す。10は壺の底部で、復元底径10.2cm、残高4cmを測る。外面に縦方向の磨きを施し、底面に葉脈痕が残る。11は壺の頸部から体部上半部にかけての部位で、残高10.1cm、いずれも復元値で頸部径7.2cm、復元胴径17.7cmを測る。外面に縦方向のハケ目を施し、その上から4条の櫛描き平行線紋を描く。

13~15は黒色粘土層からの出土である。13は壺の胴部から底部にかけての部位で、いずれも復元値で頸部径5cm、胴径17.8cm、底径5.2cm、残高15.8cmを測る。頸部が残存しないため明確ではないところもあるが、体部は算盤玉形で、下方で“く”の字状に屈曲し、下部は直線的に上部は緩やかなカーブを持つ。体部は縦方向のハケ目と横方向の磨き、底部側面はヘラなで、内面下半部は横方向の磨きを施す。14は甕の口縁部から体部上半部にかけての部位で、復元口径17cm、残高7cmを測る。張りのない端部に外反する頸部が付く。口縁端部は平坦面を持ち、この端面に沈線1条が付く。外面に縦方向のハケ目、口縁内面に横方向のハケ目、体部内面に縦方向の板なでを施す。15は壺の底部で、復元底径7.8cm、残高4cmを測る。底部に二次焼成痕が見られる。

16~19・21は谷状地形埋土からの出土であるが層位不明で、22・23は出土地点不明で、20は試掘調査時の出土である。17は甕の口縁部から体部上半部にかけての部位で、復元口径15.4cm、残高4.9cmを測る。外面に縦方向の強いハケ目を施す。18は甕の底部で復元底径7.4cm、残高4.1cmを測る。外面は縦方向にハケ目、内面に縦方向の指なでを施す。底部に葉脈痕が残る。19は底部で復元底径4.9cm、残高3cmを測る。底部側面に板なでを施す。20は甕の底部で、復元底径5cm、残高6.3cmを測る。体部内面に横方向の板なでを施し、底部に葉脈痕が残る。21と22は共に鉢の底部で、外側に突出した底部を持つ。21は復元底径5.6cm、残高3.3cmを測り、底部側面に板なでを施す。22は底径5.4cm、残高6.1cmを測り、体部外間に縦方向のハケ目、内面に磨きを施す。



0

20cm

第11図 遺物実測図 (2)

出土した弥生土器の年代観は、おおむね森田編年の摂津IV様式（弥生時代中期後半）から摂津V様式（後期前半）にかけてのものである〔森田1990〕。このうち8・11・13・14は東海系の土器であると思われる。8・13・14は遠江地域、現在の静岡県西部方面の土器と思われる〔佐藤・荻野谷・篠原2002〕。11についても伊勢湾沿岸地域の土器の可能性がある〔田原本町2003〕。

23は備前焼の壺もしくは擂鉢の底部で、復元底径16.8cm、残高3.8cmを測る。底部側面には、ヘラ削り等を行わない末調整の粗雑な造りで、底面には離れ砂痕が残る。中世以降のものであるが、小片のため詳しい年代等は不明である。

#### 【引用・参考文献】

- ・森田克行1990 「摂津地域」 「弥生土器の様式と編年」 近畿編II 木耳社
- ・佐藤由紀男・荻野谷正宏・篠原和大2002 「遠江・駿河地域」 「弥生土器の様式と編年」 東海編 木耳社
- ・田原本町教育委員会2003 「たわらもと2003発掘速報展」 Vol.8
- ・大川清・鈴木公雄・工楽善通編1996 「日本土器事典」 雄山閣

## 第IV章 まとめ

今回の発掘調査では谷状地形や流路群を検出し、弥生時代と中世の遺物の出土が見られた。この谷状地形は、当調査地の北西方向に広がる千里丘陵の谷から流れ出る、雨水の侵蝕作用によって形成された開析谷であろうと考えられる。侵蝕作用が治まると、次は流れ込んだ土砂により徐々に砂や礫などが堆積し、その後に谷を埋め尽くしてしまったものと考えられる。流路群の存在は、土砂の流入による堆積作用で谷が埋没する直前まで、恒常的に水流が存在していたことを示すものである。調査地内にはこの流路跡より西方36mの地点に、現在もほぼ同じ方向に流れる暗渠の水路がある。この水路との関係は分からぬが、流路は幾度も移動しており、不安定な様相を示していたと考えられる。この流路群が、谷状地形内においてしか検出されなかったのは、谷を埋没させた軟弱な地盤を侵蝕して、流れていたためと考えられる。

出土遺物に関しては、遺物全体の出土量に対して、東海系の弥生土器の比率の多さが目立った。これらは、当時の人々と文物の交流を物語る好資料となるであろう。

ところでこれらの遺物が、すべて流路内からの出土であることを考え合わせると、調査地点よりも上流から流水と共に運搬されてきたものと推測される。しかし当調査地より北側周辺では、該当期の集落遺跡は確認されておらず、以上の状況を考え合わせると、近隣地において未だ発見されていない弥生時代や中世の集落遺跡が存在する可能性が高いものと考えられる。



発掘調査前（南から）



機械・人力堀削風景（南から）



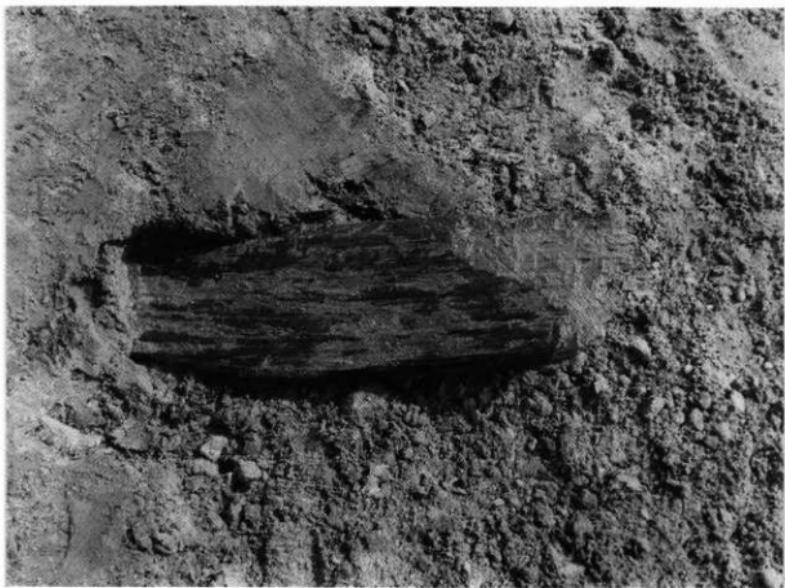
全景（南から）



全景（北西から）



砾生土器出土状况



加工木材出土状况



全景（北東から）



全景（西南から）



ピット（小穴）と木杭（南から）



谷状地形（北から）



全景（北東から）



全景（西南から）



北壁およびAセクション



北壁近景（谷状地形埋土の西岸付近）



北壁近景（谷状地形埋土の底部中央）



Aセクション（西半部）



Aセクション（東半部）



確認トレンチ南壁断面



Cセクション（北東から）



Bセクション（西から）



人力掘削（セクション崩し）



写真撮影前の清掃



遺構実測



断面実測



写真撮影



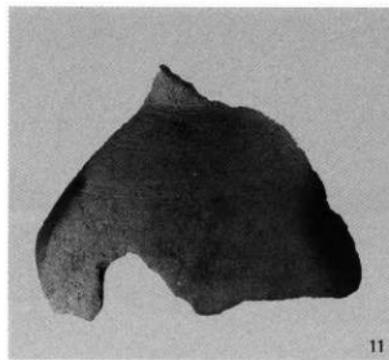
土層の分層



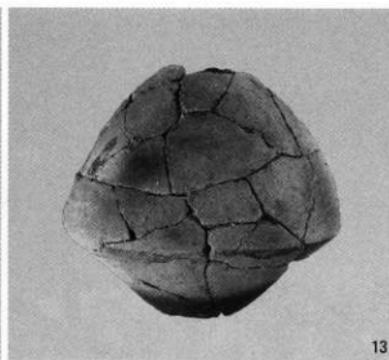
発掘成果についての説明の様子



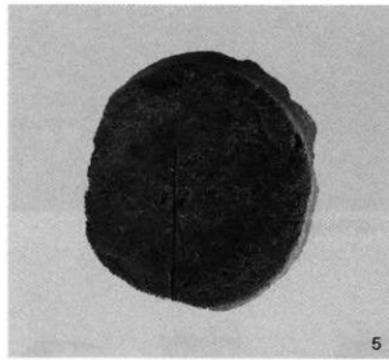
出土遺物展示の様子



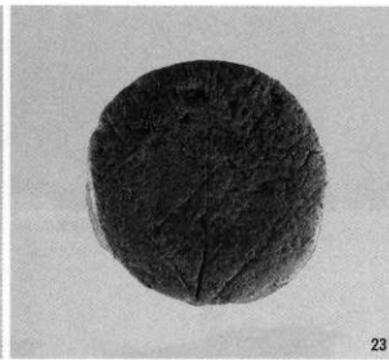
11



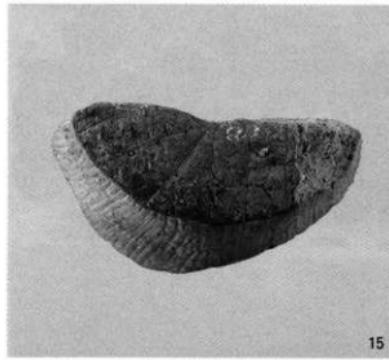
13



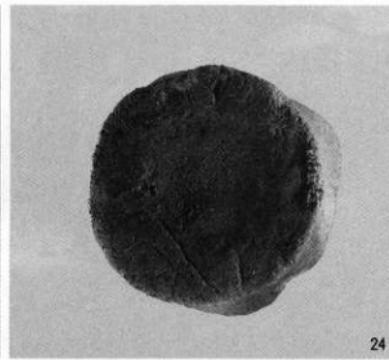
5



23

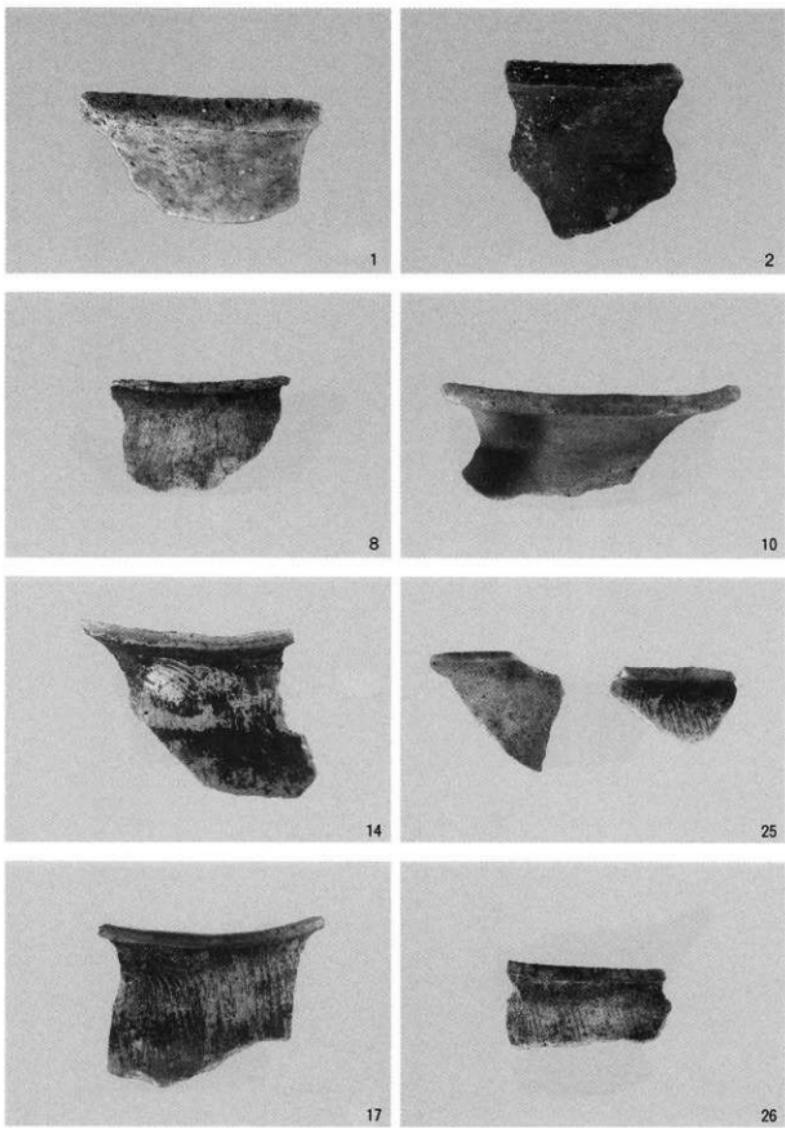


15



24

図版 13  
弥生土器口縁部





3



4



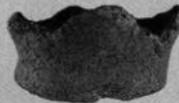
5



15



18



20



21



22

# 吹田操車場遺跡

—市営岸部中住宅建替工事に伴う発掘調査報告書—

平成16(2004)年3月31日

編集 吹田市泉町1丁目3番40号

発行 吹田市都市整備部

吹田市教育委員会